

目的 小児期は心身の発育期であり給食の意義は大きい。厚生省は保育給食を1~2才児では1日の栄養所要量の50%、3~5才児では熱量、蛋白質を所要量の40%に、ミネラルビタミンは50%を給与目標としている。今回、私達は公立保育所給食栄養量の実態を調査検討したので、結果を報告し、保育所栄養指導の一資料としたい。

調査方法 調査対象はA市立保育所給食で、昭和47年度295日分、55年度303日分である。給食献立表より年令別、年度別に下記の分析を行った。但し、3~5才児は主食を家庭から持参させるので、副食と間食のみである。栄養素として熱量、糖質、蛋白質(総量、動物性)、脂質(総量、動物性)、Ca(総量、動物性)、Fe、ビタミン(以下V.と略す)A(総量、植物性)、B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、Cの10項目とし、三訂補食品成分表より算出。各々について月別、季節別、年間の平均値(又)、標準偏差(SD)、変動係数(CV)を求めた。昭和55年度について10項目間の相関係数を求め、その結果を相関行列とした。

調査結果 各栄養素の年間又について厚生省基準値と比較すると、年令別、年度別ともにFe量が不足している。年度比較では1~2才児のV.A、3~5才児の糖質、VA(総)を除くすべての栄養素は55年度が高く、7検定によれば1~2、3~5才児の蛋白質(総、動)、Ca(総、動)、VA(植)、脂質(動)および1~2才児の熱量、糖質、VB<sub>1</sub>、C量は有意( $P > 0.01$ )の差が見出された。各栄養素間のCVはVAを除きおおむね低値であり、各栄養素摂取量に変動の少いことを示した。55年度の各栄養素間の相関行列より1~2、3~5才児とも、蛋白質と脂質、Ca、VB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、Feの間に、FeとVA、Ca、蛋白質の間などに正のよい相関がみとめられている。